

Marcus, George and Michael Fischer 1986 ch. 2 Ethnography and Interpretive Anthropology, In *Anthropology as Cultural Critique: An Experimental Moment in the Human Sciences*. The University of Chicago Press, pp.17–44.

ジョージ・マーカス、マイケル・フィッシャー 1989 「第二章 民族誌と解釈人類学」『文化批判としての人類学』永渕康之（訳）、紀伊國屋書店。

補足：『文化批判としての人類学』は、1980年代にポスト・モダニズムやポスト・コロニアル批評などの影響から、人類学内部における民族誌の在り方への反省として書かれた本である。人類学においては、実証主義とは異なる観点から民族誌やフィールドワークについての反省が起こったことを示している。

（イントロ） pp.17–25（邦訳版 pp.48–62）

- ・ 19世紀後半の人類学と20世紀の人類学は異なる。
 - 19世紀後半：一般科学の設立を目指し、考古学・生物学・社会／文化人類学が未分化であった。旅行記や植民地の資料を用いた「安楽椅子」の民族学。
 - 20世紀初頭：人文・社会科学の専門分化。資料収集と理論的解釈の作業の統合＝フィールドワーク。

- ・ 現代の社会人類学（英国）と文化人類学（米国）は次のような状況にある。
 - 世界中の文化の多様性を体系的に記述するが、人間の一般科学を打ち立てるという包括的な企ての方は廃れている。
 - しかし、民族誌の持つ知的攻撃力と魅力それ自体は、西洋社会思想の中で脚光をあび、人類学の特徴とみなされている。

- ・ 1920～30にかけて文化相対主義（米国）と機能主義（英国）は、フィールドでの資料を規定し、民族誌学的な叙述の組み立て方に関する理論でもあった。しかし、大学内外でのイデオロギー闘争を通じて、文化相対主義は方法というよりは、主義あるいは立場の表明となった。

- ・ 現代人類学は学問世界に対して知的に主要な貢献を果たしてきたが、その拠り所となったのは民族誌学的調査研究過程を支える二つの正当性だ。
 - ①文化の多様性の把握
 - ②われわれ自身の社会に対する文化批判この本はフィールドワークの体験よりも、民族誌が果たす役割を議論する。

- ・ 民族誌は専門家としての人類学者の研究教育活動に3つの役割を果たしている。

- ①模範となる民族誌テキストを読む。古典的作品の中の資料は新しい概念的、理論的問題が生まれるよりどころとなる。こうした非歴史主義的な拠り所への依拠は批判されることもあった。
 - ②民族誌は本来個人的で創造的な伝達手段である。多くの場合は実質的にその人だけが入り込めた唯一無二の研究過程をもとにして書く。
 - ③民族誌を書くことは人類学者としてのキャリアの登竜門となっている。
 - これらは人類学の中心的実践でありながら、相対的に無視されてきた。形式的な方法と研究方針に重きを置く実証主義者優勢の社会科学にあって、人類学は弱い立場にあると感じるようになっている。
- ・第二次世界大戦後、実証主義的な研究スタイルが高まった時期に、人類学が実証主義にならなかったわけではない。
- 実証主義を経て人類学者は従来問われなかった方法にさらに敏感になった。
 - フィールドワークにおける研究方針やデータの引き出し方にも厳しい姿勢で臨まなければならないという議論や、フィールドワークを語るために形式主義者の特殊用語（e.g. 参与観察、非公式インタビューといった方法論のカテゴリー化）を展開した。
- ・20世紀における、民族誌学的方法に対する独自の再検討のなかで一般主義への野心は二つのやり方で姿を変えた。
- ①全世界を網羅的に語る傾向から、ある特定の生活様式を可能な限り十全に表象する
 - ②読み手と書き手が事前に共有する、「われわれ／彼ら」という比較の修正
- ・マーカスとクーシュマンは民族誌学的テキストが評価される慣習を、写実主義文学に喩え、民族誌学的写実主義（ethnographic realism）と形容した。
- 分析されている部分なり焦点なりを使って一つの全体的な姿が浮かぶように書かれているのであり、しかもその部分なり焦点なりが分析される際には、社会的、文化的全体性が常に喚起されている。
 - 細部に細々とした注意を払い、この異世界全体を私は共有し体験してきたのだと書き手が冗長なまでに論証する。
- ・ジャンルとしての民族誌は、旅行記や探検記と似ているが、科学的であろうとしてきた。西洋文化との接触・近代化を通じて、ローカルな文化が変化するで、それを記録する（救出：salvage）という使命も担っていた。
- ・よい民族誌の基準
- ①フィールドワーク、日常生活、ミクロな次元の過程（人類学者が「現地において」フ

ィールドワークの方法を実際行ったことがそれとなく確認できる)の状況についての感覚を抱かせる。

- ②文化的、言語学的な境界を挟んで行われる翻訳(現地での考え方に対する、現地の概念や現地の言語による釈義、それが書かれてあればその民族誌学者の言語能力が認められ、彼が現地人の意味と主観性の把握に成功したことが立証される)の感覚を抱かせる。
- ③全体論¹の感覚を抱かせる
- ②と③は現在の民族誌の変化を考える鍵となる。

解釈学的人類学の登場 pp.25-33 (pp.62-75)

・ 解釈学的人類学：民族誌の実践と文化の概念との両者に対する広範な反省を包括する。

1960 から 70 年代に登場。他者の世界の内側からの説明を提供し、同時にそのような説明の認識論的根拠について反省する。

- 「社会の自然科学」、社会構造の研究から、意味、象徴、言語への着目へ移行
 - 社会行為の「とりとめのない」側面の研究に重点を置くようになった。
- ・ クリフォード・ギアツは文化をテキストに喩えた
- [客観的な立場から観察して分析する] 行動科学者と異なり、文化の解釈者は観察されている人々と同じように、社会的行為を読む。
 - 現地のインフォーマントの解釈をもとに自らの解釈を進める人類学者は自身の解釈をどのように構成しているのか、ということが問題となる

・ 民族誌のスタイルの変遷

- 1920 年代：小説やドキュメンタリーなど様々な流儀があり、実験的であった。
- 1930 年代以降：機能主義が確立し、固定された章立て(生態、経済、親族、政治組織、宗教)で書くことが仕事となり、調査者の置かれた位置は語られなくなる。
- 1960 年代以降：フランス構造主義+パーソンズの影響を受け、制度が当該文化の人が用いる概念によって構築されているのかを探ることで、機能主義流の社会学的な物象化を打破しようとした。

・ 言語学的現象やそのモデルへ目を向けたことにより、一つの過程としてのコミュニケーションを考察し、さらには民族誌の対象となっている人々のみならず、人類学者自身も含めて各個人が自ら関わる諸世界をどのように系統立てて理解しているかをめぐって一般的な検討が加えられるようになった。

¹ 機能主義をはじめとした民族誌では、あらゆる制度は社会生活の全体との関係として意味をもつとされたため、全体が指定される。

- ポスト・機能主義の主な動向
 - ①認識人類学：言語学モデルを用いて客観的枠組みに文化的範疇を位置づける
 - ②構造主義：差異の体系として文化を記述
 - ③象徴分析：言葉、行為、概念その他の象徴形式によってもたらされる意味がどのような連関関係を形作るのか
 - それぞれへの批判
 - ①、②分析者の文化的バイアスが批判される
 - ③分析者が恣意的に意味を読み取っていると批判される
- ・1960年代の言語学に支配された文化の接近の仕方には満足できないとして、次のような対応もなされた。
- 現地の観点を表象するとは一体どういうことなのかをさらに正確に概念化し、それとともにこの目的に向かって記述過程がどのように進展していくかを明らかにして、民族誌的データがどこまで確実であるかを読者が監視できるようにする。
 - 現象学の名のもとに民族誌学者の視点をできる限り括弧に入れながら、現地の人々が彼らの世界をどのように観ているかに注意を払う（理解社会学、解釈学の系譜）。

解釈学的人類学の修正 pp.33-40 (pp.75-86)

・解釈学的人類学は1960年代に現れた人類学における3つの内部批判の一つである。この一つが人類学の実践を変えてしまうような重大な衝撃をもたらした。

- ①行動と社会行動の研究から、象徴、意味、心性へ
- ②フィールドワークに対する批判
 - ・60年代から70年代にかけて、フィールドワークの体験記や、学生への指導書の中で、フィールドワークへの一連の反省もあらわれるようになる。
 - フィールドワークで出会う人類学者と文化的他者の実質的な対話が焦点となる。
 - 民族誌が、フィールドの現地の人にも読まれるような状況へ。
- ③民族誌を書く際に非歴史的、非政治的な性格がみられる点への批判
 - ・フィールドワークが通常行われる地域レベルにおいて、個人とはかかわりのないところで進行している世界規模の政治的、経済的システムがいかに内在的に作動しているかを記録できなければならない

実験的な民族誌的執筆 (experimental ethnographic writing) ²の精神と見通し pp.40-44 (pp.87-95)

・実験的に民族誌を書く試み、例：カスターネダ『ドン・ファンの教え』

² ここでの「実験的」とは、これまでにないような試みという意味である。

- 一人の人類学者のフィールドでの精神の変革体験。
- チカーノ文学者からは評価されたが、ほとんどの人類学者は民族誌とみなすのを拒んだ。
- 示された情報の源を第三者が監視し評価する道を読者に残しておくという義務に背いたから。

・実験的民族誌は、過去の民族誌学的実践と完全に切り離されているわけではなく、基本的な意味での方向の練り直しとなっている。

- 1920年代から30年代までの先駆的な民族誌はさまざまなモデルとして読まれ、民族誌を特徴づける「理論」であった機能主義は自足した社会単位（部族、民族、文化）を全体論的に記述するための枠組みとなっていた。
- 機能主義の全盛期以降、多数に上る理論なり分析方法が発展してきたが、民族誌が書かれる形式それ自体はほとんど保守的なままであった。
- 民族誌の書き手と読み手の間で趨勢や期待が変化しつつある。検証されないままあらかじめ含意の下に受け入れられてきた一定の見解から。過去の書き方へのたえざる不満と民族誌を提示する方法への緻密な検証に向けて変化が生じている。

・実験的な民族誌を共感とともに細部まで読むのは、自分とは異なる調査研究状況から生み出された発想、修辞学的手段、認識論的洞察、分析戦略をくみ上げてみたいからである。

- 実験的な試みを動機づけている精神とは、ジャンルに対する抵抗であり、つい最近まで見られた正統的基準が復権することへの拒否である。
- テキストにおいて書き手が現れ、自分がどのようにフィールドワークを行ったか、その結果として叙述する際いかなるテキスト戦略をとったか。という点に対する反省を明らかにして見せる。
- しかし、書き手が反省のための自己省察を手段だけでなく、民族誌を書く目的としてしまうと、自己顕示となってしまう。

・現代の実験的試み：文化的差異を確実に表象し、そうして得た知識を用いて、われわれ自身の生活の仕方や思考様式を批判的に検討する、という20世紀における人類学の展望に沿うような人類学を効果的に実現していくこと

- 実験的試みの二つの流れ
 - ①経験的民族誌：現地人の視点の記述方法の改善
 - ②解釈学的アプローチと歴史的・政治経済過程との融合